

氏名・・・安食 和宏（あじき かずひろ）

所属・・・三重大学人文学部

発表題目・・・海外の大学生による NINJA の認知に関する比較考察

#### 発表要旨

近年では、日本の NINJA は国境を越えて著名な存在となり人気を集めている。海外の人々は、なぜ日本の NINJA に惹かれるのだろうか、彼らにとって NINJA はどのような存在なのだろうか。本発表では、こうしたテーマに取り組み、若干の考察を試みる。用いるデータは、三重大学主催で諸外国で行ってきた「忍者文化研究プロジェクト、レクチャー・デモンストレーション」の際に聴衆を対象として実施したアンケート調査（2017～19 年実施分）である。今回は、主に大学生（大学院生を含む）による回答の集計結果をまとめて報告する。そして、地域間比較の視点より、アジア（ベトナムとインドネシア）およびヨーロッパ（ブルガリアとハンガリー）の 4 か国を主な対象とする。

集計結果の一部を示す。「忍者の何が魅力的か?」という質問に対する回答（自由記述）をまとめると、ベトナムとブルガリアの両国ともに、「忍術」「技術」「能力」「道具」などの忍者の特別な技に関わる語が多く用いられている。さらにベトナムの場合は、「黒い」「服」などの語も多く、忍者の外観も魅力となっているようである。次に、「忍者に対してどのようなイメージを持っているか?」に対する回答（自由記述）をみると、ベトナムの場合は「着る」「黒い」「服」「忍術」「秘密」「マスク」などの語が多く、忍者の人物像や秘密めいた存在が強くイメージされているようである。一方で、ブルガリアの場合は、「スパイ」「暗殺」「黒い」「殺す」など、忍者の活動を表す語が多い。なお、両国ともに、「ナルト」が多数挙げられており、このマンガ（アニメ）の影響の大きさは共通しているようである。発表においては、他の質問項目も含めて、地域別・国別比較の視点を交えて、調査結果をまとめて、考察を加えたい。

氏名： 上島 秀友（うえじま ひでとも）

所属： 日本ペンクラブ会員

## 発表題目

神君伊賀越えと伊賀者・服部中保次

—モンゴル馬から日本馬を再評価し逃走作戦と経路を考える—

## 発表要旨

『寛永諸家系図伝』に服部中保次の生国は伊賀で、家康の伊賀越えの功で鉄砲同心五十人を預かったとあるが、服部半蔵に比して無名である。多くの伊賀者由緒文書は大和越えで共通し、保次と思しき「服部仲」が登場するが、山城～信楽～伊賀という通説の前に黙殺されてきた。伊賀者保次が半蔵と並び評価されるためには大和越えが認知される必要がある。『当代記』『創業記考異』『御年譜附尾』等、家康一族による書は大和越えを記し、石見銀山奉行に取立てられた竹村道清ら宛の家康書状からは竹内峠を越え、和田織部宛家康書状からは高見峠に迂回したことが想定される。『譜牒余録』の吉川家覚書と経路図や『御年譜附尾』とも符合し、両史料とも高見峠まで伊賀衆が迎えに来たとあるから伊賀者由緒文書を補強する。『信長公記』等多くの史料は、家康は堺で本能寺の変を知ったと記す。その場合、家康が光秀のいる京都方面に向かうとは思えない。『宇野主水日記』にある「計略」とはこのことを指すのか。在来馬はモンゴル馬と遺伝子的に近く、鍛えた現モンゴル馬は1日250km以上走る能力を有す。当時の在来馬もこれに準じた能力を有したと推察する。乗馬に長けた家康は馬で大和～伊賀を疾走し、計略として供の家来を陽動隊として北に向かわせた。兵法の声東撃西に通じる計略であり、その痕跡が通説のもととなった。その意味で『寛政重修諸家譜』酒井重忠項の「大和路に御馬を向られ、伊賀路を経て」という記事は興味深い。

## ギヨーム・ルマニオン

外国人にとって、忍者は神秘的で魅力的です。しかし、あまり理解されていません。

そこで私は、世界における忍者の人気の原点に立ち返り、忍者とは一体何なのかを海外の人々に説明していきたいと考えています。

### 第一部:

忍者は日本生まれですが、なぜ世界で人気になったのでしょうか？

まず第一に、この現象は米国で 60 年代に始まりました。いくつかの記事やメディアがこの現象について取り上げましたが、実際に一般の人々に衝撃を与えたのは、ジェームズ・ボンドの 007 映画「007 は二度死ぬ」(1967 年)で、これが初めて外国人に見せられた忍者のイメージでした。

その後、忍者のキャラクターはアメリカのメディアにどんどん登場するようになり、80 年代には本格的に人気が発見し、この瞬間から「忍者フィーバー」が世界中に広まっていきます。しかし、このイメージは非常にアメリカ的であり、アメリカ人は忍者が何であるかを正確にはよくわかっておらず、汚れ仕事を担当する「影の暗殺者」という考えを強調することで独自に解釈されてきました。この人気は 90 年代に下火になりましたが、漫画「NARUTO -ナルト-」の人気で再び世界に復活し、今度は日本のメディアが世界の忍者のイメージを導くことになりました。

### 第二部:

このパートでは、忍者とは何なのかを正しく理解してもらうために、忍者に少し光を当てます。

忍者はどんな人たちでしたか？ 彼らの使命は何だったのでしょうか？ 彼らには魔法の力があったのでしょうか？ 彼らは暗殺者だったのでしょうか？ ここで誤解を正し、正しく知っていただきたいと思います。

中世日本の戦乱の時代に生まれた忍者は、諜報活動を行う使命を持っていました。冷酷な暗殺者とは程遠く、何よりも彼らの専門は自陣営にとって重要な情報を収集するために敵地に潜入することでありました。したがって、忍者は収集した情報を伝達できるように生きて戻ってくるのが使命であったため、とても隠密に行動し、戦闘を可能な限り避けました。彼らのトレーニングは、特に身体的、精神的、スピリチュアルな能力に基づいていました。彼らの最も恐るべき武器は、間違いなくあらゆる事態に対処できる創意工夫と適応力でした。

### 第三部:

忍者の伝統にもっと近づくための手段に関心のある人々に提示することです。したがって、観光と歴史的関心を強調しながら、三重県伊賀地方を訪れることをお勧めします。伊賀地方の史跡や博物館を訪ねることは、日本の忍者のイメージに近づく第一歩です。

次に、三重大学が 10 年ほど前から研究を進めており、一部の書籍が英語で入手できるようになりましたので、少しご紹介します。

最後に、忍術の学術的かつ実践的な知識を提供する公式プログラムである「忍道」プログラムを紹介します。これにより、興味のある人は歴史のおよび学術的な環境で古代の忍者の知識と訓練を実践することができます。これは今日、実際の忍術の実践に最も近い教えです。

私のプレゼンテーションが、外国人が「忍者」を正しく知っていただく機会となればと思います。

テーマ：服部半蔵の屋敷と半蔵門の由来に関する考察

家康の時代に、徳川家の伊賀者を統率したのは、服部半蔵（正成・正就父子）と服部仲（保次・保正父子）であった。天正 18 年（1590）、家康が関東へと移封となり江戸城に入ると同じくして、家臣も江戸城下に住んだ。そのうち、伊賀者は麴町に住んだことが、後に書かれた由緒書に見える。一方、服部半蔵は、現在の半蔵門のあたりに住んでいたとされ、半蔵屋敷跡に出来た門だから半蔵門と名付けられた、と考えられている。

しかし、歌人・戸田茂睡（1629-1706）が書いた江戸の地誌『紫の一本』（1680 年頃成立と考えられている）には、服部半蔵の江戸での居屋敷の位置を示す、次の興味深い一節がある。「麴町見付の御門をば半蔵口の御門といふ、これは江戸御取立の時、今の麴町に服部半蔵といひしものゝ屋敷、組の同心の家ありしゆへに半蔵口といふ、今麴町四丁目の南、松平出羽守綱近の老母の居らるゝ所は右の半蔵の屋舗」。

この記述が妥当か、『正保年中江戸絵図』（1645 年頃成立）を開くと、確かに当時の麴町四丁目南（現在の麴町三丁目、平河町一丁目付近）に「松平出羽」と書かれた一画がある。この土地は、服部半蔵の親戚とされる服部源兵衛と接し、さらに甲州街道を挟んで、共に伊賀者を統率した服部仲の屋敷がある。さらに、半蔵開基の安養院（後の西念寺）があったとされる清水谷ともほど近い。これらより、麴町四丁目南に服部半蔵が住まいした可能性は非常に高いだろう。

それでは、現在の半蔵門の場所に半蔵の屋敷が無かったとするなら、「半蔵門」の名称の由来とは何か。1606 年成立の『慶長江戸之図』を見ると、後に半蔵門が設けられる地点に「半蔵町口」という文字が見える。同じく田安門の地点には「田安土橋 飯田町口」と書かれており、飯田町は現在の飯田橋駅～九段下駅の江戸時代における地名であることから、この「半蔵町」も地名であると推測される。また一般に、麴町の名称の由来は「小路が多い」や「酒の麴を商う家が多かったから」などとされているが、これらはある程度人口が増えてから初めて言い得る事柄だろう。おそらく、服部半蔵の屋敷や、配下の伊賀者が集住していたことにもつぎ、幕府始まりの頃の麴町は「半蔵町」と呼称されていたと考えられる。そして、その「半蔵町口」に造られた門だから「半蔵門」と名付けられたと考えられる。つまり、半蔵の屋敷跡に出来たから半蔵門、ということではないのである。

加えて、服部半蔵だけでなく、服部仲もその後の地名に名を残した。先程掲げた『正保年中江戸絵図』を改めて見ると、服部仲の下屋敷が現在の四谷中学校付近に見える。後にこの一帯は「四谷仲町」あるいは「四谷仲殿町」と呼称されるが、これは服部仲の下屋敷があったことに由来する。

他に、服部半蔵配下の伊賀者らが、麴町から現在の四谷駅～四谷三丁目駅付近に移り、この地が「北伊賀町」と「南伊賀町」となることはよく知られている。先の仲町とこの伊賀町はともに、昭和 23 年（1943）の「東京都」設置にあわせ、住所としての名称からは消滅することになった。

## 木製筒砲（伊賀流忍者博物館所蔵）の表面微量残存物質分析の試み

○加藤進、紀平征希（三重大学伊賀研究拠点）

**はじめに**：伊賀流忍者博物館には花火筒あるいは木製大砲と思われる木製筒（以下筒）が大小3種類所蔵されている。この中で、江戸時代に使われたと思われる大型筒（写真）の内部に付着している痕跡物を採取し、過去に黒色火薬が使われた形跡の有無を科学的に検証した。

**資材と方法**：試料を採取した部分は、①筒本体、②導火線穴内部、③筒の底部、④裂開部（布状物質）および⑤裂開部（金属物質）であり（写真1）、そこに付着または既存していた物質をスパテル状の器具、Scotchテープに付着、

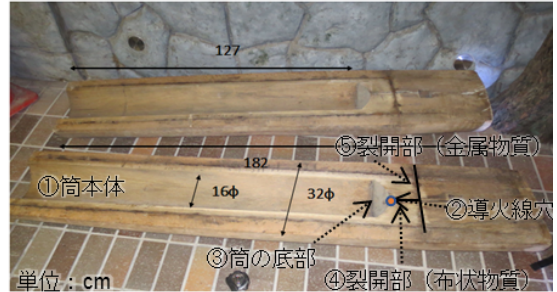


写真1大型筒の試料採取場所

彫刻刀で剥ぎ取ることにより採取した。これらの試料にどのような元素が含まれているかを調べるため、おもに走査型電子顕微鏡+エネルギー分散型蛍光X線とイオンクロマトグラフ（IC）で測定した。

**結果と考察**：筒の底には導火線穴②（8mmφ）と思われる開口部が存在した。底部には裂開部④があり、布状物質が充填されこの裂開部と90°に配置された裂開部⑤には金属物質が認められた。布状物質からはFe、

K、Si、S、Al、Ca、Pが検出され、金属物質からはFeと微量のS、Kが検出された。黒色火薬の組成は硝石（KNO<sub>3</sub>）：炭（C）：硫黄（S）=75：15：10である。一方、草木類には、Sは含まれずKが構成元素として大量に含まれている。しかし検出されたKの含有量ははるかに少なく草木類起源ではないと思われる。筒の底部③からもKとSが検出された。このことから試料に含まれるKとSは黒色火薬由来と推定した。導火線穴②の試料からはC、O、S、K、

表1 導火線穴②の試料分析結果

	導火線穴1-1	同1-2	同2-1	同2-2
C	51.26	49.3	62.5	55.9
N	8.98	10.1	ND	8
O	30.49	28.3	34.1	29.5
Si	1.01	1.01		
S	1.71	2.45		1.37
K	4.23	7.28	1.31	2.75
計	97.68	98.44	97.91	97.52

単位：mass%

Blank<1.0

Siの他に、初めてNの存在が同定できた（表1）。導火線穴付近と筒本体では燃焼反応・温度が異なると考えられる。高温の場合は黒色火薬の燃焼過程は極めて複雑であり、火薬の組成にも依存するが、典型的な推定式は $10\text{KNO}_3+3\text{S}+8\text{C}\rightarrow 2\text{K}_2\text{CO}_3+3\text{K}_2\text{SO}_4+6\text{CO}_2+5\text{N}_2\uparrow$ 、 $2\text{KNO}_3+\text{S}+3\text{C}\rightarrow \text{K}_2\text{S}+\text{N}_2\uparrow+3\text{CO}_2$ 等といわれている。反応式から、KNO<sub>3</sub>に由来するNは窒素ガスとなって空中に飛散されるので、筒底部試料や布からはN分が検出されなかったのであろう。KとSは面分析の結果、存在場所が重なり合い、反応式が示すようにK<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>の形で残存すると思われる。また、筒本体①の内部には所々に白色粉体状物質が散在していた。硝石の痕跡かと思われたが、主成分はC、N、Oであり無機物質ではなかった。以上の結果から、人為的寄与を反映したK、S、Nなどの存在が確認でき、それらは黒色火薬に起因するものと考えられる。また、当該博物館に所蔵されている残り2本の木製筒の内部壁付着物からも同様にKとSが検出され、黒色火薬の利用の痕跡がうかがわれた。

## 鳥取藩御忍の成立と展開

氏名：凜

所属：徳川家康と服部半蔵忍者隊

本報告は、鳥取藩御忍の成立と展開について、鳥取藩政資料（鳥取県立博物館所蔵）を中心に検討しようとするものである。近世の忍びに関する研究は、これまでに幕府や各藩の事例研究が積み、徳島藩、熊本藩、松江藩、福井藩、徳川幕府などがある。しかし、鳥取藩の忍びに関する事例研究については、未検討であった。そこで、鳥取藩政資料の「控帳」、「藩士家譜」、「御支配帳」を中心に、鳥取藩の御忍の事例を検討することにした。

鳥取藩の御忍は、因伯二国を代々統治した池田家に仕官した忍びである。この御忍は、徒身分でありながら御目見を許されるなど、鳥取藩のなかでも特殊な位置づけの下級武士である。これは、家業家と呼ばれる御忍の家柄に由来するものと考えられ、彼らは代々、その家業を引き継ぐ専門職としての役割を担っていた。そして、御忍は万延元年（一八六〇）から明治二年（一八六九）にかけて、家業御放となった。

鳥取藩の御忍の「藩士家譜」は、全部で一六家分残されている。そこで、本報告ではまず、御忍の概要について触れる。①呼称の変遷、②御忍の職務、③御忍の禄高である。①は、かつて夜盗と呼ばれた鳥取藩の忍びが、御忍と呼ばれるに至るまでの変遷の紹介である。②は、御忍の具体的な職務内容の紹介である。これらは、火の用心、参勤交代の御供、情報探索など、多岐に渡った。また、御忍は、御内御用と呼ばれる職務を通じて、藩主から直々に御用を頼まれることもあった。これは、徒身分でありながら御目見を許された御忍の鳥取藩における特殊性を示しているといえよう。③は、御忍の禄高の紹介である。御忍の定禄は二六俵三人扶持であり、場合によっては、加増を施されることもあった。逆に、養子および幼少の家督相続においては、減禄を課せられることもあった。

以上三点について、御忍の概要に触れた後、御忍一六家について紹介する。鳥取藩の御忍は、新四家、伊賀家一家、吉岡家七家、国府家二家、安場家二家に分けられる。ただし、時間の都合上、すべての家をひとつずつ紹介することはできないため、本報告では、まず御忍の由緒の一部について述べる。近世以前における御忍の由緒については、新家と伊賀家の「藩士家譜」にその詳細が記されている。なかでも、新長次郎家は御忍一六家のなかで最も古い歴史を持つ家である。そのため、本報告では、この新長次郎家における由緒から、家業御放に至るまでの経歴を紹介する。新長次郎家の祖先は、新平八服部保元の末流である。すなわち、本国は伊賀国である。初代作兵衛は、慶長六年（一六〇一）池田輝政に召し出された。その後、池田利隆、池田忠雄に仕官し、二代目茂太夫のとき、鳥取に移住した。新長次郎家は、八代に渡って続いた御忍の家であり、万延元年（一八六〇）家業御放後、大筒役に取り立てられた。

このように、鳥取藩政資料には、御忍に関する史料が豊富にあることがわかった。今後は、幕府や他藩との比較検討も視野に入れていきたい。(1223字)